『SOS』

作者　淺羽　一

此処は子供から届く手紙を管理する場所だ。そして私はこの部屋で唯一の管理人である。
私の手元には毎日毎日、子供達からのＳＯＳが束になって届く。親からの暴力、家での育児放棄、学校でのイジメ、大人からの性的虐待、将来への不安、中には同級生からのストーカー被害なんてものまである。
勿論、悪戯や嘘もある。けれど、わざわざそんな嘘を吐く時点でやはり何らかの傷や闇を心に抱えてしまっているのだから、ある意味、本人に自覚がない分余計に質が悪い。
ただ、それと同様に、或いはそれ以上に厄介なのが白紙で送られてくる分だ。書かないのか、書けないのか、何もないのであればそもそも手紙にすることもないのだから、だとすれば問題はどうやってその裏にある悲鳴を確認するか。
簡単な話だ。要するに、私が「読む」のである。
私は少し珍しい特技を持っている。それは自らの手で触れた「もの」の感情や記憶を読みとると言うものだ。そしてこのおかげで、私は手元に届く手紙からその真実を読むことができる。
私にとって、この能力はずっとまさしく不幸そのものでしかなかった。一度でも他人が触れたものに触ってしまうと、否応なくその時の光景が浮かんでくる。親でも兄弟でも友人でも、どれほど近しい人間でも機嫌の良し悪しはあるし、その中には他の人間が知るべきでないものも多々ある。なのに、内容に関係なく知ってしまう。例えば、ぽろっとこぼしてしまった愚痴、ふと呟いてしまった文句、勢いで言ってしまっただけの不満、その気になれば言葉にすらされていないはずの想い…等々。ましてや他者の体に接触してしまった時なんて望んでもいないのに本心・本音を洗いざらい知る羽目になる。そしてそんな場合、往々にして嬉しくなるよりも悲しくなったり傷ついたりしてしまうことの方が多い。
本音と建前を使い分けなければ生きていけない世界―いや、社会だ。それはつまり本音と建前を見破ってしまっても生きていけない社会なのだ。だからこそ、私は早々に生きていくことへの期待や希望の一切を捨てた。引きこもりを続けるには、母親に運ばれる食事から伝わる感情が辛すぎる。普通の人間を装うには、巷に溢れる真実を受け止める器が小さすぎる。かといって手首を切って首を吊るには意気地がなさすぎる。そして私は死ぬことも出来ない臆病者に相応しく、ただただ肉体を消費し、いずれ訪れる最期を待つ為だけに今を過ごすようになった。
だから、そんな私にとってこの仕事との出会いはまるで真っ暗な闇の中で針の穴くらいの光を見つけられたかのようなものだった。
喜んだと言うよりも、すがるしかなかっただけだ。とにかくこんな自分が上手く自立する為にはもうこれしかないと。私の力の存在を知る両親の人間としての苦悩を、また知ってしまう私にとって、愛情の有無に関わらず他者と共に過ごすということはお互いを不幸にしてしまう行為以外の何物でもない。
気持ちが分かる。
正直な所、私にもそれは難しい。だからこそ私は容易くそんなことを口にしない。ただ、その代わり、気持ちを知るだけなら出来る。共感までは出来ずとも、共有なら。
だから私は思う。君の気持ちを教えてよ、と。心の底ではどうせ僕の（私の）ことなんて誰も何も分かってくれないと諦める子供に、分からないからこそ教えてよと。その代わり、君のことは誰よりも知ってみせるから、と。

悲鳴を上げたいだけの子供も多い。むしろ聞いて欲しいけど知られたくないと、自身の傷や痛みを恥じている子供も多い。特に身近な相手から傷つけられている子供ほどそんな風に考えやすい。もしくは、身近な相手を大切に想う子供ほど優しすぎて苦しみやすい。

さして頭の良くない私では、心に響く名言なんて生み出せない。たった一言で疲弊しきった心を見事に癒す文才なんてない。と言うよりも、そんなものがあればいっそベストセラー作家にでもなって世界中の不幸を取り除いた方が早い。そうして戦争がなくなって貧困もなくなって差別も殺人も何もかもなくなって…みたいな理想論を綴った物語でさえあまり売れないご時世なのだから、そもそも期待するだけ時間の無駄だ。

彼らには時間がない。時間の流れが癒してくれる傷はある。だけど癒えるまでの間ずっと痛みは続き血は流れる。だとすれば一刻も早く楽になれた方が良いに決まっている。ましてや新しく生まれる不幸があればそんな慰めも意味を成さない。だから、急がなければならない。

私は順に手紙を読む。他に誰もいない部屋で、机に積まれた無数の手紙を一枚一枚、表も裏も全て読む。

そしてまた新しい手紙が来る。

白紙だ。裏も表も真っ白だ。でも、それは何も無いからじゃない。大抵の場合、何も書けないのは、万が一、誰かに見られてバレてしまうんじゃないかという不安の表れだ。同時にそれでも救われたいと理想じみた希望にすがる願望の現れだ。

私はそっと手紙に触れる。真っ白な文面に手の平で触れる。すると途端に流れ込んでくる、光景、記憶、感情、悲鳴。

ランドセルを背負った小学校高学年くらいの女の子が震える手で手紙をポストに入れている。もっと深く感じると、彼女がゴミの散らばる部屋で泣いている姿が見えてくる。さらにさらに集中すると、狭い風呂場で両肩や両腿にシャワーの熱湯を浴びせられている様子が見えてくる。響いているのは怨嗟の悲鳴でなく謝罪と懇願で、それを聞く母親らしき女も一見すれば悲痛そうな表情を浮かべている。

あぁ、これか、と思う。陰惨な話だ。相手を傷つける行為に自分こそ傷ついているのだと錯覚している大人と、相手から傷つけられる原因がすべからく自身にあると信じ込まされている子供。母親を引き離せば済む問題じゃない。その前に、子供に君が悪いわけじゃないと理解させなければならない。そして何よりそれこそが最も難しい。何故ならば少なくとも彼女は親を憎んでいない。白紙の手紙は単なる行き場のない苦しみや辛さの象徴でしかない。

私は机の引き出しから新しい便箋を取り出し、〈初めまして〉とペンで書く。決して年相応に綺麗な字でない。むしろ下手くそだ。でも、必ず手書きにする。出来る限り早く。でも乱雑にならないように。この部屋からまともに出られない自分に許された唯一の行為、一文字一文字に想いを込める。君の気持ちを教えて欲しい、と。

書き上がった手紙を封筒に入れる。宛先は書かない。元の手紙に記されていないからだ。そこで代わりに送るべき相手と場所をメモした付箋を表に貼って、電話を掛ける。別の部署の人間に「じゃあ、お願い」と電話をする。すると此処よりも幾らか賑やかな部屋で、担当の男が短く『了解』と返してくる。直後、眼前にあった手紙が忽然と消え、受話器の向こうから『配達完了』と声が聞こえる。それで通話は終了する。私は再び次の手紙へ手

を伸ばす。
　無くならないのだ、ＳＯＳはいつまで経っても。それどころか日に日に増えていってさえいる。これ程までに文明が進歩し、科学技術も発達し、いっそかつてはただのオカルトと馬鹿にされていたものですら解明されつつある時代になっても尚、子供の傷は減るどころか一層に深く大きくなっている。それは即ち、彼らを傷つける大人達自身の傷や闇が悪化している証拠でもある。世界ではどんどんと人が生きやすくなっているはずなのに、それを戯れに虫眼鏡で覗いた途端、丸いレンズの中にはどんどんと生きづらくなる社会ばかりが見えてくる。でも、その一方で、それを顕微鏡に持ち替えたら心温まる光景を目にすることが出来る時もある。だからこそ、私もこんな仕事を続けられている。まだまだ世界は捨てたものじゃないと、辛うじてでも嘘を吐かずに言えるからこそ、私もこうして生きていられる。
　今度の送り主は以前にも手紙をくれた中学一年生の男の子で、文面には彼の苦悩が綴られている。そこで私は丁寧にそれを読み、それからさらにそれを深く「読む」。大人びた文字で、礼儀正しい文章で、だけどその奥には父親に犯されていた妹を最後まで守ってやれなかった己の無力さこそを何よりも誰よりも憎んでしまっている苦しみが隠されている。
　あぁ、彼か、と思う。自分が直接に傷つけられていたわけでない。自分が誰かを傷つけていたわけでもない。だけど目の前で傷つけている相手がいて、傷つけられている相手がいて、そんなどうしようもない事実に自分自身を恨み憎しみ傷ついてしまった。
　私はまた新しい便箋を取り出して、〈こんにちは〉とペンで書く。彼からの手紙の末尾に記された〈いっそ、殺したいです〉に対して返事を書く。決してすでに捕まった父親でなく、最早いない妹にでもなく、不甲斐ない己へと向けられた彼の気持ちに手紙を書く。
　私の仕事に終わりはない。終わってくれるならそれが最も望ましいのかも知れないけれど、悲しいかな一つの不幸が消えた所で傷や病が癒えるとは限らず、ましてや幸福を感じられるまでにはとても長い時間が掛かる。そしてその間にも次から次へと手紙は現れ机に積もる。いつしか手紙は部屋中に満ちて私を埋めるほどになる。
　何重もの分厚い壁で隔てられた別の部屋では私同様の管理人が同じく子供達からの苦しみに溺れそうになっている。
　彼らが皆、私と同じ苦しみを味わい、同じ悩みを抱えていたのかなんて、分からない。或いはこの能力をきわめて有効に利用し、はたまた使い勝手の良い技術の一つとして冷静に考えてきた者だっているのかも知れない。だからもしかしたら、ことさらに人生を悲観して自らを不運の象徴のごとく思っていた人間なんて、かつての私のみと言う可能性だってゼロじゃない。ただ、それでもほんの一部でも「同じ」であるというだけで、顔も名前も知らない同僚の存在が今の私にとってとても大きな意味を成していることは事実なのだ。それはつまり、私はこの世で独りじゃない。
　だからこそ私は下手くそな字でひたすらに書く。彼らにとって顔も名前も知らない私という人間が、それでも少なくとも自分は独りでないと信じられる存在である為に。
　巨大なものを持ち上げる力も、沢山の願いを叶える魔法も、争いで亡くなった人を蘇らせる奇蹟も使えない、そんなヒーローみたいな存在にはなれない私だからこそ、私は今日も一枚一枚手紙を読んで、一文字一文字返事を書く。

〈了〉